

社会学科「サービスマーケティング」の実践報告 -2022 年度春・夏学期を中心に-
Spring/Summer 2022 Service Learning Report in the School of Sociology

岡本久*・清水美知子*・章志華*・友枝敏雄*・永井純一*・中嶋康二*・行木敬*・
疋田浩一**・真鍋公希*・南畑淳史*・八木寛之**・山本晃輔*・山本敏幸*・渡辺卓也**
Hisashi OKAMOTO, Michiko SHIMIZU, Zhihua ZHANG, Toshio TOMOEDA, Junichi NAGAI,
Koji NAKAJIMA, Kei NAMEKI, Kouichi HIKITA, Koki Manabe, Atsushi MINAMIHATA,
Hiroyuki YAGI, Kousuke YAMAMOTO, Toshiyuki YAMAMOTO, Takuya WATANABE

【抄録】

本稿では 2022 年度春・夏学期の社会学科における経験学習科目「サービスマーケティング」について報告する。社会学科では 5 地域においてサービスマーケティングを実施している。社会学科のサービスマーケティングの特徴としては通年で実施することを原則とし、各地域でサービスマーケティングを実施している。また、教員はいずれかの地域のサービスマーケティングに関わっているという特徴がある。本稿では各地域のサービスマーケティングにおける活動内容や成果、課題等を報告する。

【キーワード】

サービスマーケティング、地域活性化、プログラミング、共生社会、ディスラプティブ・イノベーション、自立支援

Abstract

This paper reports the progress of the experiential learning course called "Service Learning" in the School of Sociology for the 2022 Spring and Summer semesters. The School of Sociology conducted Service-Learning courses in five different neighboring regions to the campus. As a unique feature of the learning service offered by the School of Sociology, such learning activities are available to students throughout the academic year while other departments only offer semester-long one-credit short trainings. And, further, each service-learning has its targeted regional community for student activities. In addition, instructors are assigned to a specific local community to be fully immersed in the regional network with the stakeholders. In this report, we will report on the activities, learning processes, results, and issues to highlight in each regional community.

Keywords

Service Learning, regional revitalization, programming, kyosei society, disruptive innovation, support and assistance for persons with disabilities

* 関西国際大学社会学部 地域総合研究所学内研究員

** 関西国際大学現代社会学部 地域総合研究所学内研究員

I はじめに

本稿は、社会学部社会学科の経験学習科目「サービ斯拉ーニング」について報告するものである。関西国際大学では「経験学習」を教育の“目玉”の一つとして位置づけている。社会学科カリキュラムにおいても、「サービ斯拉ーニング」(1年次～)と「グローバルスタディ」(2年次～)が選択必修(2単位以上)科目として置かれている。

社会学科は2021年4月に神戸山手キャンパスに開設したフレッシュな学科で、「共生社会学専攻」「文化・メディア専攻」「データサイエンス専攻」という3つの専攻から成る。社会学科がスタートした2021年度の「サービ斯拉ーニング」は、試行段階として、3人の教員(岡本久・行木敬・山本晃輔)による3つのプログラムを開講した。そのふりかえりをもとに、2022年度は、神戸市内の3つの地域(神戸山手キャンパス周辺、元町、長田)と尼崎市、丹波市、計5地域において全部で10種類の「サービ斯拉ーニング」を開講した。

関西国際大学における「サービ斯拉ーニング」はこれまで、一人かせいぜい二人の教員が、夏学期もしくは冬学期に短期集中で開講する単発的なプログラムが多かった。このような形態では、担当教員の負担が重いわりには、体験学習としての教育効果が上がらないのではなかろうか。そこで社会学科では、従来型にとらわれないサービ斯拉ーニングの形について議論を重ね、2022年度からは新たに、①地域ベースのサービ斯拉ーニングへ変更する、②各地域にコーディネーター教員を置き、所属教員14名がいずれかの地域を担当する、③すべての地域で原則、春・夏学期、秋・冬学期の通年開講とする方式とする、という3つの方針を打ち出した。2022年度の各地域における「サービ斯拉ーニング」科目担当者は次のとおりである(◎はコーディネーター)。

1. 神戸山手キャンパス周辺地域…◎行木敬、永井純一、渡辺卓也
2. 尼崎地域…◎南畑淳史、清水美知子、友枝敏雄
3. 神戸元町地域…◎岡本久、真鍋公希、八木寛之
4. 神戸長田地域…◎山本晃輔、疋田浩一
5. 丹波地域…◎山本敏幸、章志華、中嶋康二

以下では、2022年度春・夏学期に実施した各地域の「サービ斯拉ーニング」の活動について紹介する。〔清水 美知子〕

II 2022年度春・夏学期サービ斯拉ーニング

1. 神戸山手キャンパス周辺地域：宇治川夏祭りに学ぶ地域活性化の課題と展望
(行木敬／永井純一／渡辺卓也)

1.1. 活動の概要

本サービ斯拉ーニングの活動の舞台は、JR神戸駅と元町駅の間、阪神西元町駅前にある「宇治川商店街」である。「メルカロード宇治川」という通称でも知られている。本学から

は歩いて 15 分ほどの距離にある。

全国の多くの商店街と同じく宇治川商店街も衰退の波にさらされている。シャッターを下ろしてしまった店も目立つが、一方でこの商店街には若い店主たちを中心に様々な活性化イベントに取り組む動きもある。中でも大きなイベントが毎年 10 月の「宇治川音楽祭」である。この音楽祭については 2021 年度秋・冬学期のサービスラーニングで学生たちがボランティアとして働き、またその経験を踏まえた上で音楽祭実行委員長の平井兵庫氏にインタビューを試みている。

今回、2022 年度春・夏学期のサービスラーニングでは、商店街で新たなイベントとして考えている夏祭りに協力することになった。祭りを盛り上げてくれるようなブースを企画・出展してほしいというのが商店街からの依頼である。前年の音楽祭から引き続き参加した者も含め、十数人の学生がこの依頼に取り組んだ。

1.2. 活動期間

2022 年 5 月- 2022 年 8 月

1.3. 活動の内容

最初の活動は 5 月 22 日、メリケン波止場でおこなわれた音楽イベント、カミングコウベの会場整理だった。商店街の夏祭りとは直接の関係はないが、学生たちのレポートをみると、人が集まるイベントにかかわることの楽しさと大変さ、その両面を知る機会になったようである。

6 月 9 日、6 月 16 日は、昨年度のサービスラーニングの学生が作成したウェブサイトを読みながら、宇治川商店会についての基本的な情報を引き継いでいった。地域やその住民との関係性がない状態での事前学習は空回りしがちなものだが、同じ学生が作成したウェブサイトを素材にすることで、また作成にかかわった学生に依頼してもらって、学生たちをうまく学習に引き込むことができた。

昨年度の学生が見つけた課題を今年度のサービスラーニングで解決するという、課題解決の連続性を作ることもねらいであった。昨年度のウェブサイトに掲載した学生たちの「座談会」には、商店街の衰退をめぐる学生たちの気づきや発見がいくつも出てくる。たとえば同じ商店街の衰退といっても、宇治川のような都市部と地方とでは事情が違う。地方の商店街の衰退は地域全体の人口減少が背景にあり、したがって外部から人を呼ぶ観光開発が再生の手段になる。一方、宇治川商店街は周囲に新しくマンションが建つことで人口はむしろ増えているが、その新しいマンション住民が古い商店街とうまくつながっていないところに問題がある。「だから音楽祭をやって地域内の交流を作っているのだ」というのが昨年度の学生たちの結論だった。

その結論が今年の学生にとっては出発点になる。マンション住民との交流を作り出せるようなブース企画はどんなものか。それを各人考えながら、6 月 23 日、予備調査として宇治川商店街を訪問した。平井氏や商店街の会長の説明を受けながら商店街を歩き、昨年度の

サイトからはわからなかったことを質問したり、ブースを出す場所や大きさを打ち合わせたりした。周辺のマンションについても改めてその多さを確認、またマンション住民の多くは小さな子供がいる若い家族だという話も聞いた。

予備調査の結果を踏まえ、**6月30日**に企画会議をおこなった。小さな子供をターゲットにしたブース企画でマンション住民を商店街に呼ぶという基本戦略と、それに沿った二つのブース企画が決定した。ひとつは工作のワークショップである。何を作ってもらおうかについては様々な案が出たが、**7月7日**の試作を通じて「**LED**ちょうちん」「オリジナルうちわ」「指人形」の三つに決定した。こちらであらかじめ紙を切ったり折り目を付けたりしておくことで、難易度を小学校低学年でも作れる程度に抑えつつ、作りたいと思えるだけの見栄えや実用性も達成しようというのが学生たちの計画である。**7月14日**はそのためにひたすら紙を切ったり折ったりした。

もう一つはオリジナルのコンピューターゲームである。工作だけでは集めにくい小学校高学年をねらった企画だが、ゼロから作っている時間はなかったので、以前別の活動で学生たちを指導して作らせた横スクロールゲームを、背景を宇治川商店街に実在するお店に変え、キャラクターやアイテムも商店街に関連したものに変えることで「メルカロード **GOGO**」というゲームを突貫工事で完成させた。こうしたゲーム制作や、商店街や小学校に貼るポスターの制作、当日のブースの装飾の準備などは、やる気や適性のある学生たちが授業時間外にやってくれた。うれしく思う反面、仕事量が不平等になってしまったことは反省点である。

7月18日（日）、夏祭りの当日となった。今回の夏祭りは商店街でも初めての試みだったため、出店するお店がそろわず、本格的なブースを出したのはわれわれだけという状況であった。お客さんも親子連れが6組、小学校高学年のグループが2組来てくれただけであった。学生たちには本当に申し訳なく思う。しかし学生たちがとてもフレンドリーに接してくれたため、子供たちがよく懐き、結果どのお客さんも**30分**から**1時間半**くらい滞在し、人が途切れる時間はなかった。学生たちのレポートをみると、自分たちの考えた企画がうまく機能して、マンションの住民を商店街に呼び寄せるといふねらいを、人数はさておき達成できたことに、みんな強い充実感を得たようである。

その充実感の勢いか、**8月6日**（土）におこなわれた下山手地区（商店街を含む一帯）の夏祭りにも、手伝いとして**3名**の学生が参加してくれた。下山手地区の夏祭りはコロナ禍で**2年**続けて中止、**2022年**もぎりぎりになって開催が決まったため、今回のサービスラーニングでは深くかかわることはできなかったが、こちらの夏祭りは毎年やってきたもので住民の認知度も高く、子供を中心にたくさんの住民たちが集まった。今回は屋台の手伝いをしただけだったが、来年度はこちらの夏祭りへのブース出展も考えている。



図1 宇治川商店街サービスラーニングの活動風景

1.4. 活動の成果、および今後の展望

上記の通り、今回の夏祭りは商店街の方の準備が整わず、ブースを出せたのはわれわれだけであったが、ともあれ前年度からの課題を引き継ぎ、調査し、課題解決のためのアイデアを出し、準備し、実施するという **PBL** のプロセスを踏ませることができたこと、またそれに学生たちが大きな充実感を得たことは大きな成果である。また、商店街の側からも、県や市からの助成金は年間を通じた継続的な活性化対策について交付されているため、われわれが夏季に夏祭りという実績を作ったことに対しては大きな感謝が寄せられた。

学生から出た反省点などはウェブサイト（制作中）にまとめ、次年度に引継ぎたい。次年度は商店街の夏祭りだけでなく、下山手地区の夏祭りにブース出展することも考えている。

〔行木 敬〕

2. 尼崎地域：プログラミングワークショップを通じた地域貢献

（©南畑 淳史／清水 美知子／友枝 敏雄）

2.1. 活動の概要

尼崎地域におけるサービスラーニングでは尼崎市およびその近郊で「地域と教育現場との連携・協働の模索」「プログラミングワークショップを通じた地域貢献」「より良いまちづくりのための市民提案の方法の模索」の3つをテーマに活動を行っている。「プログラミングワークショップを通じた地域貢献」は **2022** 年度の春・夏学期に実施し、「地域と教育現場との連携・協働の模索」と「より良いまちづくりのための市民提案の方法の模索」は **2022** 年度の後半に実施予定である。連携メンバーと役割は表 1 の通りである。「地域と教育現場との連携・協働の模索」において、地域と教育現場を繋ぐ人材が必要であり、日頃から尼崎地域での教育現場との連携を行っている株式会社 エアグラウンド 畠中 裕介氏に担当いただいた。また、**2022** 年度夏学期の中で株式会社 エアグラウンドが企画するイベントに学

生を派遣した。

表 1 尼崎サービスラーニングにおける役割分担

役割	担当者
イベント企画、学生の技術指導および地域連携のための準備	関西国際大学 南畑 淳史 関西国際大学 友枝 敏雄 関西国際大学 清水美知子
イベント企画協力および地域連携	株式会社 エアグラウンド 畠中 裕介
イベントの実施および地域交流	関西国際大学 学生

2.2. 活動期間

2022年4月-2022年9月

2.3. 活動成果

2022年度の前半に実施したイベントは表2の通りである。社会学部はまだ2年生までしかいないことからプログラミングの初心者しかいなかった。また、他学部の学生もプログラミングの教育は受けたことがない状態であった。そのため、4月から週1回の勉強会を行い、プログラミングの講師としてスキルの習得を心掛けた。その結果、7月30日からの4回のイベントにおいて大きな問題は発生せず、実施することができた。また、4件のイベントのすべてでscratchを使用した。8月および9月には学生が作成した教材(図2参照)を使用した。また、8月28日には公開されたテキストから画像を作る深層学習のモデルであるStable diffusionを使用し、画像生成体験会を実施した。このとき、Stable diffusionは2022年8月23日に公開されたばかりであり、公開から5日後であったが、学生メンバーの助けもあり、実施することができた。

表 2 尼崎サービスラーニングにて実施したイベント一覧

日時	実施したイベントとその内容
7月30日	株式会社 エアグラウンドと連携した関西国際大学 オープンキャンパスでのロボットプログラミング体験会の実施
8月4日	株式会社 エアグラウンドが主催する夏のロボット体験会~アームロボットをプログラムして尼崎城を水害から、守ろう！~へのプログラミング講師として学生の派遣およびの実施の手伝い
8月28日	関西国際大学 オープンキャンパスでのscratchプログラミング体験会およびstable diffusionを用いたAIによる画像生成体験会の実施
9月18日	音楽フェス GreenJamにてキッズプログラミングの実施



図2 学生が作成した **scratch** のイベント用の教材の一部



図3 尼崎地域ビスラーニングの活動風景

2.4. 今後の課題および展望

2022年度の前半は「プログラミングワークショップを通じた地域貢献」を中心に4件のイベントを実施した。しかし、様々な都合で中止となった計画も多数存在する。これは地域の制約の中で活動するために仕方ない事である。逆に、計画にないイベントも実施している。**GreenJam**におけるキッズプログラミングはこの例の1つである。尼崎地域のサービスラーニングでは1年単位で学生が活動するため、このような計画にない依頼に対応しやすかった。後期にもそのような依頼は数件頂いている。特にそのような依頼は依頼から数か月後に実施して欲しいということが多く、活動期間が半年など短い期間では受けにくいと考えられる。そのため、今後も1年単位で学生が活動するようになれば地域の様々な依頼を請け負うことができると予想される。

また、**2022** 年度秋・冬学期は「地域と教育現場との連携・協働の模索」の中で、株式会社 エアグラウンドと連携し、高校の教育現場との連携を行う（本学サービスラーニングを所管する社会連携課主催）。また、「より良いまちづくりのための市民提案の方法の模索」の中で、フューチャーデザインを用いて未来のまちのあり方を考えるワークショップ（本学地域総合研究所プロジェクト）を実施する。〔南畑 淳史〕

3. 神戸元町地域：兵庫県庁ドリーム・カフェの魅力づくり

（◎岡本 久／真鍋 公希／八木 寛之）

3.1 活動の概要

元町地区におけるサービスラーニングでは、「兵庫県庁ドリーム・カフェの魅力づくり」と「地域の要望に応える企画・運営連携協力」をテーマに活動を行っている。本活動報告では春・夏学期に行われた「兵庫県庁ドリーム・カフェの魅力づくり」を報告する。

「兵庫県庁ドリーム・カフェの魅力づくり」は、**2022** 年度の春・夏学期（**6**月～**9**月）に実施した。この授業では、社会福祉法人円勝会ドリーム甲子園のご協力のもと、兵庫県庁内にある障害者の自立と社会参加を目的としたカフェ（ドリーム・カフェ）のフィールドワークを行い、その結果をもとに改善策を検討・提案する内容になっている。ドリーム・カフェは障害者の職場体験事業として、円勝会が兵庫県からの委託を受け運営している。参加学生は、カフェの利用者および働き手双方の視点に立った改善策を提案した。

3.2. 活動時期

元町地区におけるサービスラーニングにおける活動時期とその概要は表**3**の通りである。**6**月上旬からドリーム・カフェの状況を学びながらフィールドワーク等を通じ、理解を深め、**9**月にカフェの改善策の提案を行った。

表**3** 元町地区におけるサービスラーニングにおける活動時期とその概要

時期	概要
6 月上旬	ドリーム・カフェの状況などについて学ぶ
6/23	ドリーム・カフェへ（兵庫県庁内）のフィールドワークを実施した
6/30	社会福祉法人円勝会ドリーム甲子園の職員の方の講演会を実施した
7～8 月	3 班に分かれてカフェの改善策に対する提案を検討、スライドを作成した
9/13	提案をまとめたプレゼンテーションを実施（社会福祉法人円勝会ドリーム甲子園の職員の方に来場いただいた）



図4 元町地域サービスラーニングの活動風景

3.3 活動成果

学生が3つのグループに分かれ、それぞれでカフェの改善提案を行うスライドを作成し、社会福祉法人円勝会ドリーム甲子園の職員の方をお呼びして発表会を実施した。発表後には、職員の方から「斬新な発想で参考になった」「取り入れる部分があれば取り入れたい」といったコメントをいただいた。

3.4 今後の課題および展望

2022年度の春・夏学期は新型コロナウイルス対策の影響もあり、フィールドワークを一度しか行うことができなかった。また、実際にスタッフとして働いている方から直接にお話を聞くことも難しかった。提案自体は高く評価していただいたものの、学生の障害者支援への理解が深まったかという観点でふりかえると、十分ではなかった点もあるように思われる。こうした反省点を踏まえつつ、ご協力をいただいている社会福祉法人円勝会ドリーム甲子園様と継続的に協議して、今後の取り組みを検討する必要がある。

〔真鍋 公希・八木 寛之〕

4. 神戸長田地域：神戸長田地区における共生社会実現に向けた活動

(©山本 晃輔／疋田 浩一)



図5 長田地域サービスラーニングの活動風景

4.1. 活動の概要

神戸長田地区における共生社会実現に向けた活動は表 4 に示す通りである。活動期間は 2022 年度春夏学期・秋冬学期と通年で活動している。

表 4 神戸長田地区における共生社会実現に向けた活動内容と連携メンバー

活動内容	連携メンバー
子どもの居場所作り「てんりん」	神視保育園：社会福祉法人イエス団
中国語教室	NPO 法人神戸定住外国人支援センター
定住外国人子ども奨学金	定住外国人子ども奨学金実行委員会
しゅうしんこう晴天食堂	天理教周神港分教会
1.17KOBE に灯りを in ながた	1.17KOBE に灯りを in ながた実行委員会

4.2. 活動の経緯および解決すべき課題

神戸を語るとき「港湾都市に由来する多文化性」が強調されることがある。学生你的生活空間では、異人館に代表される西洋建築、中華街、ムスリムモスクなど多様な文化に触れることができる。他方、今日においては、マジョリティ社会にとって都合の良い文化（例えば **3F：Food, Festival, Fashion**）だけを消費していることが問題視されている。なにより、歴史的にみれば「多文化」は排除の対象とされてきた経緯がある。

交通の要衝であった神戸であるが、社会構造的に差別されてきた人々がいる。港湾都市であることは労働問題を生じさせ、経済的な不平等は貧困問題を生じさせてきた。阪神・淡路大震災は日本人住民だけでなく外国人住民にも大きな被害を与えた。過去に見られた外国人の強制労働は見えにくくなっているが、現在も形を変えて残存している。こうしたマイノリティ問題は、神戸の「多文化」と表裏一体の社会課題でもある。

したがって、本プログラムの課題とは、華やかな「多文化共生」を捉えるのではなく、社会課題としての「多文化共生」を捉えることにある。フィールドとなるのは神戸市長田区である。長田区は多様な文化が交錯する地域であり、社会的・経済的な社会課題を有している地域でもある。具体的には、長田区は神戸のインナーシティであり、被差別部落、在日コリアン、ニューカマー外国人といったマイノリティの集住地域となっている。

本プログラムでは神戸長田区においてマイノリティ問題に取り組む市民団体に参与する。ただし、マイノリティ問題を捉えるためには、マジョリティ・マイノリティ関係をどのように把握するかが課題となる。本プログラム通じて目指すことは、マイノリティ問題と位置づけられる課題群が、マジョリティ社会の構造的な課題から生じていることを学ぶ。つまりマイノリティ問題とは、「日本社会におけるマジョリティ側の課題」であるという認識のもと、これの解決に取り組む市民活動に参与し、目指すべき「共生社会」を探ることにある。

4.3. 大学の役割

地域における大学の社会的な役割・責任は多岐にわたる。少なくとも本プログラムにおい

では「現場の日常」を「手伝いができる存在」になれることを第一の目標としている。現場を邪魔しないこと。そして社会的活動に参加できる存在を、「現場とともに『育てる』」ことが本プログラムの社会的貢献である。

4.4. 活動の内容

本プログラムでは学生の関心にあわせて、長田区内での市民活動に参加している。特定期間にのみ参加するのではなく、「現場の日常を知る」ために週1回のペースで現場に出向いている。特定の市民活動にフォーカスしないのは、①数名の学生が関わることによって、個々に責任感をもたせるためである。②そして、プログラム参加者が先輩後輩の縦の関係、そしてプログラム間（社会問題のカテゴリー横断的）の繋がりを通じて、社会問題の構造的課題を考えるためである。

- ・ てんりん（神視保育園：社会福祉法人イエス団）：地域の居場所づくりと子ども食堂活動への参加している。
- ・ 中国語教室（NPO 法人神戸定住外国人支援センター）：中国語を学ぶ地域住民に本学留学生が中国語を教えている。教えられる留学生ではなく、「教える留学生」として地域と関わることから、留学生の居場所づくりを目指した活動。
- ・ 定住外国人子ども奨学金（定住外国人子ども奨学金実行委員会）：経済的な問題から進学や学習の継続が難しい外国人高校生のための奨学金活動。事務的な取り回しだけでなく、活動の周知やイベントの企画、奨学生との交流など幅広い業務を行う。
- ・ しゅうしんこう晴天食堂（天理教周神港分教会）：新規に立ち上げられた活動。地域の子ども向けの学習支援と子ども食堂活動に参加している。
- ・ **1.17KOBE** に灯りを in ながた（**1.17KOBE** に灯りを in ながた実行委員会）：神戸長田区における阪神・淡路大震災の追悼行事の運営に参加する。そして、高齢化が進む追悼行事の担い手とともに、今後の活動の展望や意義を探る。

4.5. 期待される成果・活動成果

上述したように、本プログラムでは「現場の日常」に参加し「手伝いができる存在」を目指し、これを徹底している。お世話になるのではなく、「現場を手伝える」というのは高度なスキルが必要である。「現場の日常」には複雑な業務が網の目のように生じている。これを十全に「手伝える」というのは、大変役に立つ存在であり、現場の業務軽減に貢献できるからである。

ところで、こうした言い回しは「使われるだけの学生ボランティア」という否定的な捉え方もできるかもしれない。本プログラムのコーディネーターである山本晃輔は、これまで市民活動の現場で多くの学生ボランティアと関わってきた（受け入れてきた）。こうした経験からいえば「使える学生ボランティア」がいかに貴重な存在であるか、現場は重々承知している。使える存在は、多種多様な場で「使われる」し、様々な難題を考えることも求められ

る。現場に欠かせない存在となれば、現場の理念の実現に向けて要求されることも多くなる。つまり、現場の業務軽減に貢献できるほど深く関わったとき、はじめてその経験を問い、学ぶ材料を有したともいえよう。「使われる」ことに甘んじるのではなく、「使える」存在として現場の日常に深くコミットすることを通じて、はじめて現場の理念を「体に馴染ませる」ことを目指している。

確かに良いフィールドワーカーは「参与期間」にとらわれず、現地のことを深く学ぶことができるという。けれども、そうした卓越した技術・エートを大学生に求めるのは酷である。本プログラムでは、現場とともに過ごす時間を重視した結果、学生は「関西国際大学の学生」ではなく「〇〇さん」として現場で認知されるようになっている。現場の仕事を代替することが当たり前になるようになった学生は、すでに学生として市民活動にお世話になる存在ではなく、地域の市民と同等の存在となっている。

したがって「気がついたら社会問題に深くコミットする市民」を育てることが、本プログラムの成果である。社会問題に深くコミットできる市民は、自発的に活動を継続し、自らの関心を高めていくことが期待できるであろう。

4.6. 今後の課題および展望

すでに一部の学生は、現場になくはならない存在となりつつある。そして学生らは「共生」を現場の経験を通じて問い返すようになっている。以下、学生らの報告を引用したい。

共生とは、「すべての人や物が生きやすい社会をつくる」ことである。共生は人の生命の維持に必ずしも必要ではないので、共生のなされない社会でも人は生きていけるだろう。しかし、マジョリティがマイノリティの「生きづらさ」を知ること、街や制度が変わり、人は「生きづらさ」に対する当たり前の違和感に気づくことができるだろう。一見、自分には関係のない社会の問題でも、社会が変化することで、すべての人の生きやすさにつながる。人がよりよく生きるための社会に共生はなくてはならない。(定住外国人子ども奨学金)

グローバル化が進展している現在、以前から海外との交流が頻繁な神戸にも大勢の外国人がいる。外国人を見かけることも、日常の光景となっている。神戸では日本人と外国人が一緒になって地域社会を築くことを求められている。その中で、外国人との交流を促進し、長田地域の活力を生み出すために、この中国語教室を開設した。この外国語教室を通じて、一方的な文化学習ではなく、平等な関係を築くため、文化の壁、言葉の壁、心の壁を取り除き、日本人も、外国人も日本社会の生活者の一員として、共に認め合い、文化を通してみんなを繋ぐことが、ここでの「共生」だと私たちは考えた。(中国語教室)

様々な事情を抱えている子どもたちが社会から孤立しないように支えあい、家

庭や学校以外の第三の居場所を提供することで、将来を担う子どもが安心できる場所をつくる。誰でも相互に人格と個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合うということの重要性。社会的弱者でも地域の人々と社会的繋がりを通して社会に参加できることが必要である。(てんりん)

マジョリティ・マイノリティ関係のなかにある「生きづらさ」。日本社会に存在する「壁」。「社会的弱者と孤立」。こうした学生らの言葉は、プログラム担当者が設定した課題ではなく(プログラム担当者は「共生」についてのみレクチャーしている)、学生らが探りだした共生の課題である。

すでにプログラム担当者が指導する受講生の中には、プログラム担当者より「現場を知る」学生が生まれている。本プログラムの展望は、学生らが現場での経験を通じ、サービスマスターニングという学修プログラムから自立し、自らの関心をもって市民社会に参加することである。そして深い関心を抱いた学生らは、先輩後輩関係を通じて他の学生にも「場」を提供する存在となっていくだろう。そこに生じるアクチュアルな議論が、社会学部での学びをより深めるものとなるはずである。〔山本 晃輔〕

5. 丹波地域：「地域社会と都会が相互依存する未来社会」を地域のステークホルダーと協働でディスラプティブ・イノベーション(未来創造)する

(©山本 敏幸／章 志華/中嶋 康二)

5.1. 活動の概要

丹波及び大阪深江地域におけるサービスマスターニングでは、「地域社会で消えつつある有形・無形の価値・知恵や財産を学び、SDGsの観点から「地域社会と都会が相互依存する未来社会」を地域のステークホルダーと協働でディスラプティブ・イノベーション(未来創造)する！」をテーマに活動をおこなっている。夏学期は主に丹波市島地区の有機野菜栽培や北奥地区の有機野菜農家の遠隔地での活動が中心である。冬学期は無形文化財の保存に力を注いでいる大阪深江地区の菅の編笠保存会との交流を通して、地域の無形文化財、文化価値の保存を中心に地域のステークホルダーたちと活動している。本稿では夏学期について報告する。

5.2. 連携メンバーと役割

大学生と地域の連携活動においては、地域と大学を繋ぐリエゾンの存在が必要であり、そういった方たちの打合せや段取りがないとうまく機能しない。本サービスマスターニングでは、プログラムのコーディネーターである山本敏幸が、以前から丹波地域のステークホルダーたちと築き上げてきたネットワークを活用し、地域の皆さんの協力の下、学生たちとの協働の機会が得られた。

表5 丹波サービスラーニングにおける役割分担

役割	担当者
協働活動企画、学生たちとの情報共有および地域連携活動のきっかけづくり	関西国際大学 山本敏幸 関西国際大学 章 志華 関西国際大学 中畠 康二
地域の課題・問題点の共有	いちじま丹羽太郎 秋山知美 いちじま丹羽太郎 荒木武夫
菅笠保存会での課題・問題点の共有	深江菅田保存会 代表 山地幸子

5.3. 活動期間

2022年4月-2023年3月31日

5.4. 活動成果

2022年度の夏学期に実施したイベントは表5の通りである。

2022年度はコロナ禍の影響で、学生たちのフィールドワークがうまく機能しなかった。新型コロナウイルスに感染したり、濃厚接触者になり、フィールドワークの参加を断念せざるを得ない学生たちがいた。留学生の受講生もいたが、数名しかフィールドワークに参加できなかった。参加できた学生たちは、実際に現地で調査、ディスカッションができたおかげで、学習意欲があがった。参加できなかった受講生たちには、ビデオで活動内容をできるだけ収録し、後で共有した。臨場感は薄れたが、多少なりとも雰囲気味わえた。

表6 イベントの日時と実施内容

日時	実施したイベントとその内容
8月6日	荒木武夫氏より丹波市島地区での有機野菜栽培・販売の歴史と課題点について講演・ディスカッションをおこなう。
8月6日	秋山知美氏より、有機野菜を食材にした有機野菜カレーをいただく。有機野菜農家さんの苦勞、悩み、過疎地で生活をしていく上での課題点・問題点を共有してもらおう。地域ならではの山林地域の問題、無形文化財の保護と維持についての課題等を共有してもらおう。



図6 丹波地域サービスラーニングの活動風景

5.5. 今後の課題および展望

今後は、社会学科の学生たちだけではなく、他学科の学生たちにも魅力的なサービスラーニングにしていきたい。特に、ディスラプティブなイノベーションを最大限に活用して学生たちの新鮮な目で、古くからの地域の課題の解決に向けて新機軸を創造していくことは意義があることのように思う。特に留学生の持つ日本の文化に固定されないものの見方をもっと活用できるように工夫していきたい。

今回取り上げた丹波での地域の問題は、日本の各地で存在している。そこには、共通する要素がたくさんあるように思う。本サービスラーニングのコーディネーター山本敏幸は、**2021**年度の夏から南あわじの大学と地域の連携プロジェクトに携わっている。かつて瓦産業で栄えた南あわじ市雁来岬地区は、今ではペットといっしょに楽しめるリゾートとして賑わい始めた。**2023**年度以降、丹波同様に活動の領域を広めていきたい。

大学生にとってはイノベーションで再生する未来社会の実例として、丹波でイノベーションを起こすきっかけにしてほしいと考えている。大学と一つの地域が線で結ばれるだけの地域連携ではなく、大学がかけはしとなり、地域と別の地域が結ばれる地域連携モデルを構築していきたいものである。〔山本 敏幸〕

III おわりに

本稿では、社会学科が**2022**年度春・夏学期に開講した5つの「サービスラーニング」について見てきた。本格的に始まってわずか**6**か月の授業から、いかほどの教育効果が上がったかを論じることは早計であろう。しかし、**2021**年度秋・冬学期と同じ地域、同じテ-

マで実施した大学近郊の宇治川商店街や神戸長田のサービスラーニングでは、上述のとおり、効果の兆しが見え始めている。たとえば、宇治川商店街のサービスラーニングでは、昨年度に受講した学生が再び受講することにより、学生の生の声で経験値が語られ、「課題解決の連続性」という好循環が生まれた。また、神戸長田のサービスラーニングでは、受講生が複数のイベントやプログラムに参加し、足しげく現場に通うことで、地域について多角的・複合的に考え、意欲的に取り組む学生が現れた。いずれのサービスラーニングにおいても、上級生と下級生、経験者（先輩）と未経験者（後輩）が混在することにより、縦のつながりがプラスに作用していることもうかがえる。くわえて、教員にとっての効果も見逃せない。関与の度合いは異なるとはいえ、サービスラーニングへの関わりを通して、本学の経験学習が目指す「現場と教室の往還」を教員各人が我が事として体感することができた。それは、社会科学の共通文化として醸成されつつある。

社会科学では **2022** 年度秋・冬学期も、**5** 地域5つのサービスラーニングの活動を展開している。なかには、**2021** 年度秋・冬学期、**2022** 年度春・夏学期に引き続き同じ地域で活動する学生もいれば、前学期とは地域を代えて新たに活動を始めた学生もいる。受講生の中から、「卒業研究」のテーマとして地域の社会問題を取り上げる学生も現れるかもしれない。

他方、**5** つの地域での活動を通して、授業運営の難しさも浮き彫りになった。たとえば、神戸元町サービスラーニングでは、ステークホルダーが障害者施設であることから、新型コロナウイルス感染症拡大により現場での活動が大きく制限された。また、尼崎サービスラーニングでは、「プログラミングで地域貢献」という性格上、授業時間外での自主的な勉強が必要になるために、履修者が限定的になったことは否めない。さらに、丹波サービスラーニングでは、「自然」が相手のプログラムであるがゆえに、台風等の影響を受け当初のスケジュール通りには進まず、フィールドワークに参加できない学生も出てしまった。これら諸問題をいかに解決していくかは今後の課題である。

本学科では **2023** 年度も **5** つの地域で「サービスラーニング」を開講する。今年度の成果と課題を踏まえ、よりよいプログラムになるよう改善を重ねていきたい。〔清水 美知子〕

【謝辞】

各地域「サービスラーニング」のステークホルダーの皆様にはたいへんお世話になりました。社会科学教員一同、心より御礼を申し上げます。